

スタンドポイント理論における方法論的要請 の位置付け--「周縁化された立場から探究を 開始する」ことの意義について--*

大橋一平

概要

Research in the humanities and social sciences that aims to improve unjust situations such as sexism and racism in research environments often advocates "prioritizing the experiences of marginalized positions" as its methodological guideline, with Feminist Standpoint Theory (FSP) cited as its theoretical foundation. However, while this methodological requirement is considered a central claim in FSP discussions, its significance within the theory has not been clearly articulated. This paper examines how this methodological requirement is positioned in relation to the various theses of FSP.

This paper first organizes recent debates surrounding FSP, confirming that these debates primarily focus on the epistemic justification of what is called the "inversion thesis." It then points out that recent FSP has accepted the inversion thesis claim in connection with empiricism in an excessively weakened manner. As the author's argument, I discuss the problems inherent in the recent trend toward "minimalization" of the inversion thesis. Specifically, the "methodological imperative" of "beginning inquiry from marginalized positions," which can be considered the core of FSP, finds its positioning left in suspension under the minimalization of the inversion thesis. I argue that the minimalization of the inversion thesis significantly weakens the methodological imperative or may even conflict with it, and demonstrate the epistemic harms that arise as a result.

Finally, as a way to resolve these problems, I propose the necessity of distinguishing between the concept of epistemic privilege and the concept of epistemic advantage. This is an attempt to

* CAP Vol. 17 (2026) pp. 16-34. Submitted: 2025.09.08. Accepted: 2026.03.17. Category: 研究論文(原著論文).
Published: 2026.04.20.

understand epistemic privilege as "the starting point of inquiry as awareness of oppression." I then show that the methodological imperative is not merely a consequence of the inversion thesis, but rather that critical analysis based on the former provides the grounds for making the latter a persuasive claim within existing oppressive value frameworks. What becomes important in this context is the aspect of the methodological imperative as "empowerment" for epistemic subjects.

Keywords: フェミニスト認識論、スタンドポイント理論、認識的特権、反転テーゼ、方法論的要請

1 はじめに

フェミニストスタンドポイント理論(以下 FSP)とは、端的にまとめるならば、社会において周縁化されている立場の知識主体が、社会的に特権的な立場を占める知識主体よりも、ある文脈においては、認識的に有利な立ち位置にある、という理論である。この FSP の主張は、一見して直観的に受け入れやすい一方、FSP の内外において多くの論争を巻き起こしてきた。

そして研究環境における性差別や人種差別といった不正な状況の改善を志向する人文科学、社会科学は、しばしばその方法的指針として、「周縁化された立場の経験を第一に参照すること」を訴えており、その理論的基盤として FSP が参照されている。しかし FSP の議論において、この方法論的要請は中心的主張とされているものの、理論のなかでどのような意義を有しているのか明確にされていない。本稿はこの方法論的要請が FSP の諸テーゼとの関係のなかでどのように位置付けられるのか検討する。

本稿では、まず FSP をめぐる近年の論争を整理しつつ、その論争の焦点が主に「反転テーゼ」と呼ばれる主張の認識的正当化をめぐるなされていることを確認する。その上で、近年の FSP が反転テーゼの主張を経験主義との接続のなかで、過度に弱める仕方で受容している点を指摘する(反転テーゼのローカル化とミニマル化)。そして筆者の主張として、近年の反転テーゼの「ローカル化」に「ミニマル化」という傾向が組み合わさることで生じる問題点を論じる。具体的には「周縁化された立場から探究を開始する」という FSP の核ともいえる「方法論的要請」が、反転テーゼのミニマル化においては、その位置付けが宙吊りになっている。また反転テーゼのミニマル化は方法論的要請を著しく弱める、もしくはそれと対立する場合があることを論じ、その上で生じる認識的害を示す。最後に、上記の問題を解決するための方途として、認識的特権という概念と認識的優位性の概念を区別する必要性を提案する。それは認識的特権を「抑圧に気付くこととしての探究の出発点」として捉える試みである。その上で、方法論的要請が反転テーゼの単なる帰結ではなく、既存の抑圧的な価値基準のなかで後者を説得的な主張とするための根拠を、前者に基づく批判的分析が与えるという点を示す。その上で重要となるのは、知識主体に対する「エンパワメント」としての方法論的要請の側面である。

2 研究の背景・先行研究

2.1 FSP の基本的アイデア

FSP は 1980 年代以来、フェミニスト認識論の内外で多くの論争を巻き起こしてきた。初期の FSP はマルクス主義的な階級分析(プロレタリアのスタンドポイント)をジェンダーの分析に適用することで、知識主体のジェンダーが知識生産やそこにおける権力関係に与える影響を分析してきた(Hartsock 1983)。後のスタンドポイント論者たちは、ジェンダーという単一の軸だけでなく、人種やセクシュアリティといった軸に分析の枠組みを拡大することで、知識生産における不均衡な権力関係や抑圧のメカニズムを明らかにしようとしてきた(Collins 2000)。

そしてスタンドポイント論者たちの間でも、スタンドポイント¹とは何か、被抑圧的な立場の人々の認識的特権とは何かについての見解は様々である。例えば、Collins は「スタンドポイント」を、階層的権力関係において同様に位置付けられた人々の集団によって共有される集合的知識として理解しており、スタンドポイントを持つことは、自分たちの経験を特徴的な(しかし同一ではない)方法で解釈することに導く「共有された視角」をもつことであり、それは共有された集団ベースの経験によって可能になると論じている(Collins 1997; see Tilton 2024, 5)。また、Wylie によれば、スタンドポイントとは「知識生産に対する態度を形成し育て上げていくための[それぞれの社会的位置付けに置かれた人々が獲得しうる]特徴的な能力」のことであり、それは「自らの社会的位置付けの本性とその位置付けがもたらす認識的影響を批判的に吟味する意識」を育んでいく共同的な「プロジェクト」である(Wylie 2004, 344)。

近年のスタンドポイント論者が重要性を共有しているのは、伝統的な認識論においては非認識的要素として無視されてきた、知識主体のアイデンティティが認識論的に重要である(Toole 2024)、という点である。

以下では FSP の主張に見られる基本的な 4 つのテーゼを Tilton の整理を参考にしつつ確認する(Tilton 2024)。以下のテーゼ全てをスタンドポイント論者たちが同じ仕方で共有しているわけではないが、少なくとも FSP の主要な論点として共有されている。

1. 状況に置かれた知識テーゼ The Situated Knowledge Thesis

知識主体は社会的に位置付けられており、知識主体の社会的位置は、私たちが何を知ることができ、何を知識とみなすのか、どの様に知識を獲得するのかを形づくり、制限している。

2. 反転テーゼ The Inversion Thesis

「支配構造のもとに置かれ、その構造によって一貫して周縁へと追いやられ迫害されている人々が、実は、重要な点で認識的に特権的な位置にいることがある」(Wylie 2004, 339)。例えば、周縁化されてきた人々は、特権的な立場にいる人々が気づかない証拠や証拠の用い方、また支配的でない仮説についてアク

¹ 本稿では「スタンドポイント(standpoint)」と「地位(position)」という訳語を用いている。前者が批判的探求のなかで獲得されていくものであるのに対して、後者はすでに社会的に位置付けられているものである。

セス可能であるかもしれないし、それらを発見しようとする関心を有している。

3. 達成テーゼ The Achievement Thesis

周縁化された立場の人々が有するスタンドポイント、ないしそれに基づく認識的特権は、その社会的な地位にいることから自動的に与えられるものではなく、様々な状況のなかでの批判的奮闘を通じて獲得されるものである。

4. 方法論的要請 The Methodological Imperative

少なくともある知的探究は、周縁化された人々の立場から探究をはじめなければならない。なぜなら、周縁化された人々の生や経験は、より私たちの社会の構造についての正確なもしくは批判的な探究のための資源をもたらすからである。

これらの4つのテーゼはそれぞれ相互に関連している。達成テーゼにおいて、ある知識や探究が可能であるのは、特定のパースペクティブやスタンドポイントを獲得している(しようと目指している)人々によってのみである。そしてこの達成テーゼは、反転テーゼにおける認識的特権の根拠であると同時に、認識的特権をより高めるものでもある。なぜなら認識的特権は自動的に与えられるものではない点で達成テーゼはその条件であり、他方で周縁化された人々が自身の社会的・認識的な立場を既存の社会構造のなかで自己理解し、その社会構造のメカニズムを批判的に見る視点を獲得していこうとすることは、認識的特権を高めるからである。また、反転テーゼと方法論的要請の関係については、一般に次のように理解されている。すなわち、反転テーゼの認識的特権に関する主張が、探究の出発点を周縁化された人々の経験に定める方法論的要請の根拠を与える、という理解である(大橋 2025)。この理解においては、まず反転テーゼが認識的特権を主張し、その帰結として方法論的要請が導かれるという関係が想定されている。しかし本稿は、この一般的な理解を問い直し、両者の関係を再定式化することを試みる。

2.2 反転テーゼに関する諸解釈

これら4つのテーゼのなかでもFSPにとって中核に位置しているとされ、もっとも議論がなされているのが反転テーゼとその認識的特権についてである。以下この反転テーゼについてのいくつかの解釈を概観していく。

まずHardingによる「強い客観性」の主張がある(Harding 1992)。Hardingは他のフェミニスト認識論者と同様に、正当化の文脈と発見の文脈を区別する伝統的な価値中立的な客観性理解を批判することで、強い客観性を提示する。強い客観性は、知識生産の過程において、その歴史的、社会的な背景、科学コミュニティの関心を検討に付すことで、研究に内在する構造的バイアスを発見していくことを求める(Harding 1992, 445)。

そして客観性を最大化していくためには、支配的な枠組みから周縁化された人々の経験から研究を始めなければならない。なぜなら特権的な立場にいる者が気づくことのない抑圧の構造について、批判的な観点をもたらし、コミュニティ内の批判性を高めるためである。周縁化されている者はコミュニティからの

排除を不可避免的に生きざるを得ず、生延びるために抑圧的な構造について学んでいかなければならない認識的関心を有している。

上記のような Harding の議論に対して多くの批判がなされてきた。例えば、ある社会的に位置付けられた視点がより優れていると判断するための具体的基準が提供されていないことや、反転テーゼを支持する証拠が示されていない点である(Rolin 2006, 125)。前者の批判は、「なぜ特定の周縁化された立場の人々に認識的特権があるのか」という問い、後者の批判は、「認識的特権を正当化する根拠とはなにか」という問いである。それゆえ FSP の主な焦点はこの反転テーゼの認識的正当化の問題に集中している。

この批判に応答するため、近年のスタンドポイント論者たちは、反転テーゼの主張をより経験的に正当化可能な仕方で弱める傾向にある。Wylie は、Harding と同様に被抑圧的な人々の認識的優位性を認めつつ、その認識的優位性を非-基礎づけ主義的かつ非-本質主義的な仕方で示そうとする(Wylie 2004)。周縁化された立場にある知識主体に自動的に認識的な特権が与えられる、もしくはいかなる場合においても周縁化された主体の知識の認識的特権を基礎付けるような客観性が存在するという主張は、知識の歴史性や地域性といったものを超えた普遍的で確実な基礎を求める点で、経験的な正当化に耐えることができない。

Wylie が周縁化された者の認識的優位性として検討するのは、「個々の具体的な認識的プロジェクトに対して、あるスタンドポイントがいかなる認識的重要性をもつか」、という問題である(Wylie 2004, 344)。つまりあらゆる状況を超えた確固とした認識的特権の基礎を求めるのではなく、個別の状況ごとにどのような認識的優位性²が発揮されるのかについて経験的分析をすることが主張されている。Wylie は反転テーゼにおける認識的優位性の主張を、文脈依存的で「偶然的」な、諸々の「認識的特長(virtues)」(経験的十全性や内的整合性等)の組み合わせの主張として理解する。Crasnow と Intemann が指摘しているように、Harding に対して、Wylie の立場は、FSP の主張を経験主義と両立可能なものとし、反転テーゼにおける認識的優位性を個々の探求のケースに役立つ「一つの資源」とみなす傾向にある(Crasnow and Intemann 2024, 74)。

このような経験主義との接続をより進めている立場として Intemann による「フェミニストスタンドポイント経験主義(feminist standpoint empiricism)」がある(Intemann 2010)。Intemann は FSP とフェミニスト経験主義とを調停しつつ、FSP における認識的特権についての主張を、あるプロジェクトにおいて重要である特定の経験的証拠にアクセスできるか否かという地点にまで弱める。また Harding の被抑圧的な立場の認識的優位性として捉えていた知識探求における政治的な関心の問題を、あくまでより幅広い多様な経験的証拠を得るための道具的に価値あるものとして位置付けている(Intemann 2010, 793-4)。本稿はこのような Wylie に見られる、認識的優位性の評価が個々のプロジェクトの経験的条件に依存するとする主張を「反転テーゼのローカル化」として定義する。

また近年の議論では、周縁化された社会的地位と認識的優位性の関係について、より精緻な区別が

² 論者によって「認識的特権(epistemic privilege)」をもちいるか「認識的優位性(epistemic advantage)」をもちいるかは様々である。ただ傾向として「認識的優位性」は個々のプロジェクト内で発揮される一種の「特徴」のように説明されるケースが多い。

提案されている。Tilton(2024)は、社会的立場付けに基づく「観点的優位性(perspectival advantage)」と、批判的意識の達成に伴う「スタンドポイント的優位性(standpoint advantage)」を区別し、前者については周縁化された経験の認識的重要性を積極的に認めている。同様に Toole (2024)も、周縁化された社会的立場に伴う「認識的優位性(epistemic advantage)」と、スタンドポイントに特徴的な「認識的特権(epistemic privilege)」を区別し、前者については周縁化が必要条件であると明言している。しかしこれらの論者の傾向として、スタンドポイントに伴う認識的優位性にとって、周縁化された社会的地位は「十分条件」でなく「必要条件」ですらないとする、反転テーゼの「ミニマル化」がある(Dror 2023, Toole 2024, Tilton 2024)。例えば Dror は従来の反転テーゼに対する「弱い反転テーゼ」として、周縁化されている立場の人々の認識的特権とその社会的立場との関係はあくまで傾向性があるに過ぎず、原則的にはいかなる社会的立場にも認識的特権は開かれているとする(Dror 2023, 624)。また Tilton は周縁化された立場の人々の経験が認識的に重要な要素を与えることは認め、そのことがスタンドポイントを獲得するために有利である点を認めるが、周縁化された社会的地位がスタンドポイントの獲得にとって必要条件である点是否定する。スタンドポイントの獲得は社会的に特権的な立場の人々も同様に目指すべきものである(Tilton 2024, 13)。特に Tilton の立場を要約するならば、一方ではスタンドポイントの獲得にとって周縁化された立場は必要ではなく、あくまでその獲得を有利にすると述べてつつ、他方では周縁化されていない立場の主体がスタンドポイントを獲得するには周縁化された者の経験を出発点としなければならないと述べている。しかし Tilton ら反転テーゼのミニマル化による説明では、方法論的要請をスタンドポイント理論のなかでどのように位置付けるべきなのかが説明されていない点が問題である。

3 反転テーゼのミニマル化とその問題点

本稿では上記のような近年の FSP の議論が、(1) 主に反転テーゼに集中し、方法論的要請との関係については明示的に議論の主題としていない点、そしてその結果として生じる(2) 反転テーゼのローカル化ないしミニマル化の傾向とそのリスクに対して警鐘を鳴らす。これまで近年の FSP における反転テーゼの傾向を、反転テーゼの「ローカル化」と「ミニマル化」として区別して論じてきた。

反転テーゼの「ローカル化」は、認識的優位性が発揮されるかは各プロジェクトの経験的条件に依存するとする傾向である。この傾向においては、あらゆる状況を超えた確固とした認識的特権の基礎を求めるのではなく、個別の状況ごとにどのような認識的優位性が発揮されるのかが経験的に評価される。

反転テーゼの「ミニマル化」は、周縁化された社会的地位がスタンドポイント達成の必要条件ではないとする傾向である。この傾向においては、周縁化された経験が認識的に重要な要素(証拠へのアクセス、動機、摩擦の経験等)を提供することは認められるが、スタンドポイントの達成は原理的には社会的に特権的な立場の者にも開かれているとされる。

これらは独立した主張であり、ミニマル化は必ずしもローカル化を含意しない。しかし本稿が問題とするのは、これら二つの傾向それ自体ではなく、両者が組み合わさることで方法論的要請との間に生じるであろう緊張関係である。ここで両者が組み合わさった立場とは、スタンドポイントの獲得とは区別された認識

的優位性(ないし観点的優位性)に関しては周縁化された立場から探究を開始すべきとしつつも、スタンドポイントの獲得に関しては経験的に検証される限りでその優位性が認められるとする立場である。実際この立場は当然想定可能なものである。なぜなら Tilton 自身最も自身に近い立場として Wylie の立場を評価し、観点的優位性と社会的立場を結びつけつつも、スタンドポイントの獲得に関して社会的立場は必要ではないとしている(Tilton 2024, 13)。とはいえ、ミニマル化の論者たちがこの立場を実際に主張しているわけではない。しかしミニマル化の論者たちは認識的優位性が発揮されているか否かを評価するためにどのような方法を採用すべきか明確に論じていないために、各プロジェクトにおける特定の経験的評価基準のもとで、周縁化された知識主体のプロジェクトへの貢献を判定し、認識的優位性の正当化根拠とするというローカル化の論者たちの立場を採用する可能性は大いに考えられる。

たとえば Dror(2023)は弱い反転テーゼを次のように定義している。

社会的に周縁化された人々は、その社会的地位ゆえに、自らに関わる社会的周縁化の作用に関する事柄を知る上で、非抑圧者よりも優れた認識論的地位を持つ傾向がある。これは、彼らがより関連性の高い経験とより強い動機づけを持つ傾向にあるためである(ただし、これらの経験と動機づけは原理的には非抑圧者にも開かれているものである)。(Dror 2023, 624 引用者強調)

Dror(2023)によれば周縁化された人々が認識的優位性を持ちうるのは、差別や社会的不正義のメカニズムに関する「情報量の多い経験」をする可能性が統計的に高い、もしくは自身の状況を改善するために不正な社会システムを理解しようとする動機が比較的強い傾向にあるためである。そのため Dror は周縁化の経験が認識的優位性をもたらすのはある特定の状況のもとで、より情報量の多いないし強い動機をもつ「傾向にある」ためであり「偶然的な」ものであると述べている(Dror 2023, 623-4)。

反転テーゼのミニマル化の傾向に共通しているのは、周縁化された立場の観点的ないし認識的優位性(スタンドポイントの獲得とは区別された)として重要な証拠へのアクセス可能性や特定の抑圧的な問題について学ぼうとする強い動機の重要性をあげつつも、それがどのような仕方でスタンドポイントの獲得にとって重要であるのかに関しては個々のプロジェクトや状況に依存するという点である。それゆえ、反転テーゼのミニマル化の主張が反転テーゼのローカル化の主張を補完するという立場は自然であるといえる。以下ではこのようなミニマル化された経験主義的立場が方法論的要請との関係でいかなる問題を提起するかを検討する。そして次節においてこのミニマル化された経験主義による認識的優位性と認識的特権の理解に対して代替的な主張を展開する。

FSP にとって周縁化された立場から研究を始めるという方法論的要請は前提でありつつ、核となる主張であり、反転テーゼは方法論的要請を根拠づけるための議論であると一般にみなされている³。それゆえ

³ Harding は初期の著作から一貫して、FSP の核となる主張を、周縁化された経験から探究を開始することによる客観性の最大化としている(Harding 1992, 2015)。

反転テーゼについての評価は方法論的要請との関係からなされる必要がある。反転テーゼのミニマル化の傾向は、方法論的要請との関係の下で検討するならば、FSP 自体にとって非常に問題あるものとなりかねない。以下では、反転テーゼのミニマル化が、方法論的要請を著しく弱める場合と、もしくはそれと対立する場合について論じ、それらが引き起こす認識的害について示す。

まずミニマル化が方法論的要請を弱める場合である。ミニマル化された経験主義によれば、認識的優位性に関しては周縁化された立場それ自体によって得られるものの、周縁化された立場の認識的特権が認められるのは、特定のプロジェクトにとって個々の認識的優位性が「経験的に重要である」という条件のもとで評価された結果である。その際方法論的要請が機能するのは、周縁化された人々の経験がプロジェクトにとって関連がある限りで、どのような経験的証拠が得られるのか、どのような証拠に対する分析、解釈が可能かを評価する水準に制限されている。つまりそこでは周縁化された人々の認識的特権を評価するにあたり、無批判的に既存の経験的評価の基準(証拠の重要性や証言の信用性を判断する)が前提されている⁴。したがって、研究プロジェクト自体の選択やリサーチクエスチョンを精査する段階、どのような経験がプロジェクトにとって重要であるのかを判断する段階に関して、方法論的要請は機能しないことになる⁵(大橋 2025)。

次にミニマル化が方法論的要請と対立する場合である。反転テーゼのミニマル化によれば、周縁化された社会的立場は、認識的特権にとって「十分条件」でないだけでなく「必要条件」ですらないとするのであった。方法論的要請の根拠が認識的特権であり、その認識的特権を周縁化された立場に固有なものではないとするならば、認識的特権は経験的に検証される限りで認められるものとなる。それは認識的特権が認められるのはあくまで検証の結果であり、探究の開始点とはならないということである。そのことは方法論的要請を実質的に意義のないものとしてしまう(大橋 2025)。

⁴ 確かに Wylie は、経験的評価基準を「無批判的に」利用しているわけではなく、知識探究者のスタンドポイントに応じて複数の経験的評価基準項目のトレードオフを行うなど経験的評価基準自体の意識的な調整は可能であるという立場を提起している(Wylie 2004; Crasnow and Intemann 2024: 72–73)。しかしその「意識的な調整」に「誰が」参加可能なのかという問題が再度浮上する。その基準の調整過程への参加には、Wylie 自身が挙げるような認識的資源——専門知識、学術的議論の作法、理論的・概念的道具の使用能力——が要求される。しかし、抑圧の条件にはまさにこれらの認識的資源への不平等なアクセスが含まれている。それゆえ、抑圧された者は認識的特長の調整過程への参加において構造的に不利な立場に置かれてしまう。この問題を Wylie は解決できていない。

⁵ クラスノウとインテマン(Crasnow and Intemann 2024)は、科学探究の以下の 9 つのフェーズを区別している：

1. 研究領域／主題の選択
2. その主題について取り組まれるべき問題の枠づけ(仮説生成)
3. どの観察が関連するかの決定
4. それらの観察に基づくデータ収集
5. そのデータの分析または解釈
6. データ収集をいつ停止するか決定
7. 証拠に基づく結論の導出
8. データに対する代替仮説または説明の考慮
9. それらの結論の頑健性の検証(代替仮説の評価を含む) (Crasnow and Intemann 2024, 59)

ミニマル化された反転テーゼにおいて、周縁化された知識主体は第 1 のフェーズから第 3 のフェーズまでの研究に能動的に貢献することができない。

このような反転テーゼのミニマル化された経験主義と方法論的要請との衝突が引き起こしうる認識的害を二点挙げる。一点目は研究デザイン自体(仮説形成やリサーチクエスションの設定)を検討する際の議論の場への参加の条件が、当の研究プロジェクトにおいて既存の評価基準のもと重要であり、検証される認識的特権に制限される場合である。この場合、研究デザイン自体を形作っている既存の概念枠組みに内在している構造的偏見や抑圧的なステレオタイプを検知し、それらを是正していく段階への参加機会が著しく減ってしまう。

確かに Tilton(2024)や Toole(2024)が強調しているように、周縁化された立場に基づく認識的な利点は様々存在する。それゆえ、その立場ゆえにプロジェクトにおける重要性は認められるかもしれない。しかしそれが経験的に検証される限りで結果的にそのプロジェクト内で認められるものならば、特定のプロジェクトの指針に基づく限りでの優先性に制限される。しかし、FSP が元来問題としてきた、研究の始めから無視されてきた特定の集団のニーズや関心は、「それ自体」として評価されることも、尊重されることもない。

例えば、Freeman(2015)は、産科暴力の文脈において、妊娠している自身の身体に対する母親の一人称的な権威に基づいた証言が、それ自体としては真剣に受け止められず、医学的な技術(超音波技術や FHM)や既定の手続きの権威性のもとで認められる限りでのみ、考慮されるという問題を指摘している。その際、母親の医学的手続きに対する違和感や苦痛といった経験が手続き上重要でないものとして無視されることによって、母親は自身の妊娠した身体に対する認識的特権が部分的にしか認められず、自身の身体から疎外されるという経験をする。またこの医学的手続き上における妊婦の一人称的経験の無視は、定量化可能な客観的基準という名目のもと、歴史的かつ体系的に行われてきたものである。「胎児超音波検査は、妊娠の技術的監視が女性に対する統制の新しいが馴染みのない秩序を構成する家父長制的権力と権威の配置を保持する」ものであった(Freeman 2015, 49)。

それゆえ、既存の経験的評価基準(しばしば暗黙のものである)を無批判に採用する反転テーゼ解釈では、当の基準においてある知識が歴史的に周縁化されてきたという事実が見過ごされている⁶。したがってその基準において周縁化されてきた知識を適切に評価するための新たな価値創出の現場に、周縁化されてきた知識主体が主体的に参加することを、保証することができない。

また被抑圧的な主体の探究への参加を阻む第二の問題として、反転テーゼのミニマル化解釈が、当の知識主体の「認識的な」周縁化の歴史的過程を十分に考慮することなく、研究上利益の見込める認識的優位性のみを論じている点がある。

例えば、精神医学における当事者参画という文脈において、「生きられた経験の研究者(lived experience researcher)」という仕方、精神保健ユーザーを生きられた経験の専門家として、研究に参画させようとする際に生じる「選択の圧力」という問題がある。研究への参画において重視される「生きられた経験」というものが、ある程度の精神的健康の規範を前提しているために、「あまりに不調」(例:入院措置)、「あまりに狂気」(例:代替的見解に固執している)、あるいは「技能不足」(例:システムが価値を置く

⁶ 例えば精神医学において、既存の理論では評価できない当事者のニーズが無視されてきた事例については Friesen & Goldstein(2022)を参照。

方法でコミュニケーションできない」と見なされる者は排除される」(Okoroji et al. 2023, 3)。それゆえ、研究に貢献するように招かれるのは、既存の学術的・職業的規範の制約内で従事することができる者に限られ、その集団は「生きられた経験のエリート」として構成される。このことによって、研究への当事者参画という一見周縁化された人々の経験を反映するプロジェクトにおいても、当の当事者の選別に際する規範が問い直されないために、その規範自体が維持ないし強化されてしまう。それにより、生きられた経験のエリートから排除された、より周縁化されている人々の経験は研究に適切に反映されることがない。

また Collins が強調するように、FSP が特定の歴史的に周縁化されてきた集団の経験から議論を始めることは、その集団が自身を知識主体として認め、自身のニーズに適った知識を探究していくために、その集団を「エンパワメント」という重要な役割をも担っている(Collins 2019, 139)。エンパワメントは、周縁化の結果掘り崩された、知識主体としての承認や自己信頼を回復するために重要である。自身のニーズに基づいた批判的関心を形成していく過程(スタンドポイントの獲得)において、知識主体としての承認や自己信頼はなくてはならない。このような承認や自己信頼を獲得していく過程を無視するならば、コミュニティのなかで知識の主体になることができないだけでなく、単なる知識の対象として搾取される可能性がある⁷。反転テーゼのミニマル化が方法論的要請と対立する場合、周縁化された立場の知識主体の探究コミュニティへの参加が優先されないどころか、必ずしも保証されないことになる。これは FSP がそもそも抑圧を受けている人びとが既存の学問から排除されていることを問題視することを最も強いモチベーションとしているにもかかわらず、FSP 自体が、既存の学問の問題ある規範を強化することになりうる点で問題である。

4 「周縁化された立場から探究を開始する」ことの意義

4.1 認識的特権と認識的優位性の区別

以上で論じてきたローカル化およびミニマル化から生じる問題点を克服するために、私は以下の二つの作業を行う。まず本節では、第一に周縁化された人々が研究共同体から適切に知識主体として尊重されていない段階で考慮されるべき「認識的特権」と、そして、具体的な研究プロジェクトにおいて周縁化された知識主体がどのように参画していくべきなのかという段階で考慮されるべき「認識的優位性」を区別

⁷ 産科暴力の文脈において、妊娠している女性の経験的な認識的特権が、産婦人科の専門家の認識的権威にもとづいて評価・利用可能なものに制限されることで、妊娠している女性の専門家の評価に対する違和感の経験がないがしろにされ、さらに自身の経験を専門家の「客観的」観点から再解釈するよう促される場合を考えてみよう。その場合、妊娠している女性の自身の身体経験に対する信頼が揺らぎ、一人称的経験に対する自己理解が妨げられる。そしてそのことによって、さらに既存の診断、評価基準や手続きに対する違和感を表明することが困難になり、妊娠している女性は単なる医療の「対象」として扱われやすくなってしまふ。

すべきであると主張する⁸。この段階的区別は先行研究では指摘されてこなかった点であるが、しかし歴史的に周縁化されてきた知識主体の研究共同体への参画を検討するならば非常に重要である。なぜなら前者の問題(そもそも研究共同体から適切に知識主体として尊重されていない前提状況をまずは問題とすべき段階)への取り組みがなされていないにも関わらず、後者の問題を反転テーゼを用いて検討することは、まさに前節で問題にしたような周縁化された知識主体のさらなる周縁化や搾取の可能性を助長するからである。

そしてその成果をふまえて次節では、第二に方法論的要請のスタンドポイント理論における役割を再定式化するために、スタンドポイント理論の諸テーゼを方法論的要請との関係から規定し直す作業を行う。

一点目の「認識的特権」と「認識的優位性」の区別に関して本稿では次のような主張をする。「ローカル化」を主張する人たちによって問題とされてきた(各プロジェクトの枠内で経験的に検証される限りで認められる)「認識的優位性」とはまた別に、既存の評価枠組みでは自身の経験が説明されえないという気付きの経験に基づく、探究の出発点としての認識的資源である「認識的特権」というものを認めるべきである。本稿はこれまでのスタンドポイント論者たちが共有するところの「認識的特権」の中核的な要素、つまりある社会的地位にいる人々はスタンドポイントを獲得するために認識的に特有の立場にあるという点は共有しつつも、ローカル化やミニマル化の論者たちが論じてきた様に、認識的特権を特定のプロジェクトにおいて経験的に検証可能なものや、周縁化の経験を必要条件とはしないものとする解釈には同意しない。本稿はあくまで認識的特権を歴史的に周縁化されてきた社会的地位に基づくものとする解釈をしつつ、それを既存の解釈とは別様に規定する。

つまり個々のプロジェクト内で発揮されうる認識的優位性に対して、周縁化された立場の認識的特権を「抑圧に気付くこととしての探究の出発点」と捉える方針を採用すべきである。客観的な探究がその探究内にある構造的偏見やバイアスに気付き、それらを是正していく試みであるならば、被抑圧者の経験が客観的な探究の出発点とされねばならないのは、その探究の共同体のなかで周縁化されてきたという経験それ自体である。なぜならそれは既存の概念枠組みでは自身の経験が「説明されえない」という気付きの経験だからである。既存の概念が自身の経験の説明には「不十分」、ないし「不適切」であるという基礎的な気付きの経験は、既存の概念枠組みと自身の経験、そしてそれらの違和感について暗黙に意識しているということである。その経験は共同体内での抑圧のメカニズムを探っていく関心やそれに基づいた既存の概念枠組みとは別様の枠組みを発展させていく協働的探究を可能にする。

またこの自身の経験が既存の評価枠組みでは説明されえないという気づきの経験は、既存の評価枠組みを刷新する上での前提となる、周縁化された集団間での同一性と差異性に対する批判的気づきをもたらす。それは、同じ周縁化された集団に属しつつも個々人の違和感に関する生きられた経験は異な

⁸ 多くのスタンドポイント論者は両者を区別していないが、近年の論者は前者を社会的立場が必要条件ではない批判的議論を通してあらゆる人が獲得しうる「スタンドポイント」、後者を社会的立場に基づいたものとして区別している(Toole 2024)。

るものの、Pohlhaus が述べているように、「人の社会的位置付けから生じる状況は「共通の課題(common challenges)」を創出し、それが知識主体の生きられた経験の一部を構成し、よってその人が世界に接近する際の文脈に寄与するもの」であるからだ(Pohlhaus 2012, 716–717)。つまり、既存の評価枠組みに対する違和感の経験は、単なる個々人の経験の差異に還元されるものではない。それぞれの知識主体が共通して直面している抑圧の構造が、個々の知識主体に対して、その課題に対応していくために、抑圧の構造がどのように働きうるのかに対する予期や注意、関心の習慣化の形成を導くのである。例えば、同じ「女性」や「障害者」といった社会的地位にありつつも、それぞれの人々の経験は多様である。しかし、家父長制や健常主義、それらが交差する支配的な同じ社会を生き延びるということは、その差別や排除の働きに注意をめぐらし、予期しつつ、それに対処することを生活の中で学んでいくことである。つまりそれぞれ異なる社会的地位に生きる知識主体らは、それぞれの社会的位置に共通する周縁化の構造に対して、どのような態度をとり、どのようなニーズをもつのか、その共通性と差異の認識を持ちつつ生存している。

認識的特権を上記のように示すことは、FSP を実効的なものとする上で重要である。FSP がそもそも問題としてきたのは、研究コミュニティ内における周縁化されている特定の人々の存在やその知識を正当に評価することを困難にしている、歴史的に形成されてきた評価基準や構造的バイアス、偏見を発見することであった(Harding 1992)。それゆえ、FSP は特定のプロジェクトにとって知識主体が認識的優位性を発揮しうるのか否かという判断の前に、すでに研究コミュニティ内で共有されてしまっている抑圧的な認識基準を認知することが第一に重要である。

そしてその認知のためには、実際に抑圧を被っており、それに違和感を感じている人々、またそれぞれの多様な抑圧のなされ方によって被る困難が異なっていることを感じ取っている人々の生きられた経験が第一に参照されなければならない。なぜならそれ以外の人々は現状の抑圧的な認識基準に気づくために必要な経験に基づく認識的資源を欠いているからである。このような意味で、上記で示した周縁化された立場の認識的特権は、FSP は探究をどこから開始すべきなのかの第一の参照点であるという意味で、特権的なものである⁹。

しかしこのことは、周縁化された立場にはいないが、フェミニズム等の知識のある人々の意見を聞かなくてよい、ないしそれらの人々は関与しなくてよい、ということの意味しない。これらの人々は、周縁化された人々の経験を参照し、自身の見解を修正しつづけ、その認識的な正当化をするために常にコミュニティからの批判に曝され続けそれに応えていく責任を負っているからである¹⁰。

⁹ 本稿は、「あらゆる知識探究において普遍的に認識的特権を持つ人々が存在する」という主張を行っているわけではない。本稿が対象とするのは、当該探究コミュニティ内において歴史的に周縁化されてきた人々がすでに存在し、その周縁化が当該コミュニティの評価基準や概念枠組みに構造的偏見として内在している可能性のある探究である。このような探究においては、当該コミュニティ内で周縁化されてきた人々の経験を出発点とすることが、構造的偏見の発見と是正のために重要である。

¹⁰ このような専門家の認識的に責任あるあり方は、知識主張の認識的正当化において、主に認識的コミュニティを重視する Longino ら批判的文脈主義の立場に見とることができる(Rolin 2011)。専門家は自身の知識主張を正当化するために、それが適切であるのかコミュニティメンバーからの批判に関与する義務があり、また他の共同体成員によって受け入れられた証拠と論証の基準に訴えることによって自分たちの知識主張を擁護する義務がある。この専門家の認識的に責任あるあり方はスタンドポイント理論においても衝突することなく応用可能である。

これらの意味で、上記の認識的特権の規定は、個々のプロジェクトにおける認識的優位性やスタンドポイントを獲得していくための基礎になりうるのである。

4.2 反転テーゼと方法論的要請との関係を再考する

以上の「認識的特権」と「認識的優位性」の区別ないし方法論的要請の段階づけの作業に基づき、以下ではスタンドポイント理論の諸テーゼを方法論的要請との関係から規定し直す作業を行う。2.1 節で確認したように、反転テーゼと方法論的要請の関係は一般に次のように理解されている。すなわち、反転テーゼが認識的特権を主張し、その帰結として方法論的要請が導かれる、という一方向的な関係である。この理解においては、方法論的要請は反転テーゼの「単なる帰結」に過ぎないことになる。

本稿はこの一般的理解に対して、両者の関係を逆転して再定式化することを提案する。具体的には以下の二つのことを主張する。

1. 方法論的要請は既存の評価基準のなかで、反転テーゼを説得的に主張していくための根拠をあたえる。
2. 方法論的要請は達成テーゼを実質的に可能にするための条件である。

これらの主張の間には、主張2が主張1を間接的に基礎づけるという関係が成り立っている。というのも反転テーゼと達成テーゼは前者の主張の根拠を後者が与える関係にある。周縁化された立場の知識主体は、その社会的地位にいることから自動的に認識的特権が与えられるわけではない。周縁化された知識主体であったとしても、支配的価値基準を内面化した結果、自身の社会的地位の認識的影響や抑圧の経験を批判的に検討せず、支配的基準をそのまま受け入れてしまう場合がありうるからである。それゆえ、反転テーゼが正当化されうするためには、集団的に自身の社会的地位について批判的に検討することを通じたスタンドポイントの獲得を目指す態度が必要である。それゆえ、第二の主張をすることは、第一の主張を間接的に基礎づけるものである。

反転テーゼと方法論的要請との関係

4-1 で行ったように認識的特権と認識的優位性を区別することは、方法論的要請が単なる反転テーゼの帰結であるという見解を問いに付すことになる。つまりミニマル化された反転テーゼが既存の経験的评价基準に基づいて認識的優位性を評価するのに対して、方法論的要請は、周縁化された主体の認識的特権に基づいて、その既存の経験的评价基準やそこで重視されている認識的価値を批判的に評価する関係にある。また方法論的要請によって周縁化された知識主体の認識的特権を認めることは、新たな認識的価値が創出される機会を認めることである。そのことは反転テーゼによる認識的優位性の評価基準を刷新することにつながる。

例えば Friesen と Goldstein があげている例が参考になる(Friesen & Goldstein 2022)。精神医学の現場において、精神医療のサービス利用者やマッド・コミュニティは既存の精神医学における、「ウェルビーイ

ングは症状の軽減と同等である」という、この分野に深く埋め込まれた前提に異議を唱えてきた。そこでは疾患を治療するという医療の目的のうちに、どのように有意義な人生をおくるのかという患者の目的が考慮されていない。そこでは「治療目標としての症状軽減に焦点を絞ることで、多くの人が良い生活の中心と考え、必ずしも症状軽減と共存しない多くの側面が軽視されてしまっている」(Friesen & Goldstein 2022, 670)。例えば、社会的支援、有意義な関わり、衰弱させる薬の副作用のない生活などの、病や障害とともに生きていく中で重要であると患者が経験している諸々の価値や苦痛が、精神医学の既存のウェルビーイングの概念枠組みでは説明されないのである。この違和感の経験をもとに、ウェルビーイングを単に症状尺度の改善として定義する既存の枠組みへの抵抗が、ユーザー主導の研究ではなされてきた(Friesen & Goldstein 2022, 671)。

つまり、個々のプロジェクトにおける反転テーゼの根拠づけは、方法論的要請による既存の価値枠組みの刷新のもとなされるべきである。上記の例の文脈では、精神疾患のサービス利用者にとって、精神医学におけるウェルビーイングの概念やその根拠となる客観的に評価可能な症状軽減という基準は重要でありつつも、唯一の重要な目的ではない。それ以外の当事者の幸福にとって重要な考慮事項(社会的支援、有意義な関わり、薬の副作用のない生活など)が適切に反映され、それを評価する枠組みが問い直される必要がある。そして、個々のプロジェクトにおいて、改訂された評価基準の下、見出された認識的優位性は反転テーゼの根拠を与え、周縁化された知識主体の認識的権威の信頼性を向上させ、方法論的要請をより説得的にする。例えば、精神疾患のサービス利用者の視点を研究や診断基準に反映させるなかで、新たな認識的価値が発見され、既存の評価基準の不十分さが同定されることは、その問題を指摘し続けてきたマッド・コミュニティのような当事者コミュニティの研究上の貢献を認め、その知見を第一に参照することの重要性を高める。

それゆえ、方法論的要請は既存の評価基準のなかで、その評価基準を問い直し、刷新するために、現状では周縁化されている主体の経験を第一の参照点として研究の批判的分析を促進することで、反転テーゼを説得的に主張していくための根拠となる。

達成テーゼと方法論的要請の関係

達成テーゼは反転テーゼに認識的根拠を与える。それゆえ達成テーゼの実効性にとって方法論的要請はその条件であるという主張を行うことは、間接的に、反転テーゼの条件として方法論的要請を位置付けることになる。

達成テーゼの実質的な実現可能性にとって方法論的要請はその条件であるという主張を検討するために、まず達成テーゼをより詳細に確認しておく必要がある。Rollin は達成テーゼによるスタンドポイントの獲得を三つの点で特徴づけている。第一に、スタンドポイントを達成するには、科学的知識が産出される社会的条件を批判的に意識する必要がある。第二に、スタンドポイントの形成への参加には、他の参加者といくつかの道徳的・社会的価値を共有することが必要である。そして第三に、スタンドポイントは個人的というよりはむしろ集合的達成である(Rollin 2016, 14-15)。

重要であるのは、達成テーゼによって探究コミュニティ内の支配的な評価基準や規範に対して批判的

な視点を獲得していくためには、単に探究コミュニティ内で周縁化された地位にいただけでなく、コミュニティへの主体的な参加が可能でなければならないという点である。なぜなら、そのような批判的な視点を獲得するには、支配的な評価基準内にあるバイアスや偏見がいかに経験に照らして不十分であり不適切であるかを理解したうえで、それに代わる基準を発展させる必要があるが、そのためには、コミュニティ内で流通している既存の概念資源を利用しながら、それらに異議を申し立てるような何らかの共同的な表現を行わなければならないからである。例えばマッド・コミュニティやマッド・スタディーズでは、歴史的に精神医学の言説がどのように精神疾患を悪魔化してきたのかを学びつつ、その意味づけに対抗するような代替的な当事者の経験に即した語りの可能性を領域横断的に模索してきた。それゆえ、達成テーゼが十分に成されるためには、方法論的要請による探究コミュニティへの主体的参加の保証が必要となる。

だが、同時に検討すべきなのは、達成テーゼには方法論的要請による知識主体に対する認識的な「エンパワメント」が必要不可欠であるという点である。前節で述べたように、すでに既存の支配的価値のもとで周縁化されている主体は、自身の認識的能力や知識主体としてのあり方に対しての自己信頼が揺るがされている。また Roessler が指摘しているように、歴史的に知識主体としての価値が過小に評価されてきた認識的に抑圧的な状況においては、知識主体としての自律的あり方にとって重要な「自己価値」と「自己知識」が疑念にさらされ、それらの発展が阻められてしまっている(Roessler 2014)。そのため、単に主体的参加が保証されているだけでは、「実質的な仕方」で批判的視点を獲得していくのは困難である。したがって、知識主体としての自身の認識的能力や知識主体としての価値に対する自己信頼を回復し、同時にエンパワメントしていく内的な過程が検討されねばならない。

この点を強調しているのが、スタンドポイント理論の古典的テキストである Collins による「内なる部外者から学ぶこと(Learning from the Outsider Within)」である(Collins 1986)。この論考のなかで Collins は白人男性中心の探究コミュニティに表面上所属しつつも、同時に適切な知識主体としてみなされず周縁化されている黒人女性の独自の社会的-認識的地位を「内なる部外者 outsider within」と呼んでいる。このテキストにおいて注目すべきは、黒人女性が自らのスタンドポイントを獲得していく達成の過程において、黒人女性の経験を中心においた探究の重要性を指摘している箇所である。

それは第一に、知識主体が周縁化された状況にありながらも、同時に知識主体としての自身のあり方を「自己定義(self-definition)」し、かつ「自己評価(self-valuation)」することを、知識主体に促すということである。

客体化された「他者」としての自己定義を促進するイメージに直面しながら、自分自身の自己定義されたスタンドポイントの意識を定義し価値づけることは、支配システムに本質的な非人間化に抵抗する重要な方法である(Collins 1986, 18)

つまり、周縁化された立場の経験から探究を始めることは、「内なる部外者」という地位が有する固有の経験と価値を意識的に自覚することを助け、それによって外から付与されてきた、知識主体の信用性を毀

損する否定的な評価的イメージに抵抗、改訂していくことを知識主体に促すのである。それはつまり、知識主体が自身の経験に基づいて知識主張する際に行使する認識的能力に対する自信を促し、主体が自身を正当な知識主体として認めることを通じて、自身に向けられる信用性評価を不当なものとして反論していくということだ¹¹。

第二に、周縁化された立場の経験から探究を始めることで、知識主体の自己定義と自己評価を促進させることは、知識主体に内面化された心理的抑圧への抵抗にもつながる(Collins 1986, 18)。認識的に周縁化された状況化において、支配的価値基準に合致しないが故に、知識主体の経験に基づく知識が「重要ではないもの/無関係なもの irrelevant」と体系的に評価されるならば、「自分自身の知識の根拠が正しいもの、そして価値のあるもので、自ら支持できるものであると捉えることができなくなる」(Roessler 2014, 74)。それゆえ、周縁化された知識主体が批判的なスタンドポイントを獲得していく過程にとって、自己定義に基づく自己評価は知識主体が自身の認識的能力を信頼のおける仕方で行使することができるという自己理解し、正当な知識主体として自身を認めるという仕方での自己信頼をするために重要なのである。

スタンドポイント理論における方法論的要請が認識的な意味で知識探求をエンパワメントするということの意味は、第一に、しばしば客観的な知識探求を歪ませる、複雑に絡み合った抑圧的な力に直面している知識主体の社会的経験に第一の参照点として目を向けることで、不可視化されているが知識探求にとって重要な証拠の生成、発見を促進させるということである(Rolin 2009)。そして第二に、第一のエンパワメントが実効的となるための条件として、方法論的要請は、周縁化された知識主体が自身の振る舞いや社会的営みを自ら定義、評価し、それらに基づいて知識主張することに対して認識的権威を付与することで、達成テーゼが前提する主体に、知識探求の場への参加のための内的な支えを与えるのである。

したがって、Collins が「知識の重要な源泉として、彼女ら自身の個人的ないし文化的な自伝を信頼すること」(Collins 1986, 29)が知識生産の場への貢献には必要であると述べるように、周縁化された知識主体のスタンドポイントの獲得(達成テーゼ)のためには、方法論的要請による外的(知識生産の場への主体的参加の形式的保証)かつ内的(主体的参加のための知識主体の自己信頼の促進)なエンパワメントが必要不可欠である。

最後に本稿が反転テーゼのローカル化およびミニマル化に対してどのようなオルタナティブな解釈を提示してきたか整理しておく。本稿の立場は以下の三点においてローカル化ないしミニマル化と異なっている。第一にローカル化に対しては、本稿は個々のプロジェクト内で経験的に検証される「認識的優位性」とは区別された「認識的特権」の概念を導入する。認識的特権とは、既存の評価枠組みでは自身の経験が説明されえないという気付きの経験に基づく、探究の出発点としての認識的資源である。ローカル化が認識的優位性の評価を個々のプロジェクトの経験的条件に委ねるのに対して、認識的特権はそうした経験的评价に先立って、評価枠組み自体を問い直すための参照点として機能する。これにより、ローカ

¹¹ Collins は Audre Lorde を引用しつつ以下のように述べている。

「この文章において、オードリー・ロードは独立した自己定義がいかに黒人女性に社会変革をもたらす力を与えるかを探究している。「主人の」イメージを拒否する自己定義されたウーマニスト的視点のために闘うことによって、アフリカ系アメリカ人女性是我々自身を変える。変化した意識を持つ個人の臨界量は、今度黒人女性の集合的エンパワメントを育むことができる。変化した意識は、人々に彼らの生活の条件を変えるよう励ます。」(Collins 2000, 117)

ル化が回避しようとしていた本質主義の問題に対しては、認識的特権を普遍的・固定的な属性としてではなく、特定の探究コミュニティにおける歴史的な周縁化の経験に基づくものとして理解することで対応する。

第二にミニマル化に対しては、ミニマル化が回避しようとしていた「周縁化されていない人々の認識的免責」の問題に対しては、本稿は二つの水準で応答する。一方で、認識的特権を周縁化された経験に基づくものとして維持することで、探究の出発点における周縁化された知識主体の不可欠性を確保する。他方で、周縁化されていない人々に対しては、周縁化された人々の経験を参照し自身の見解を修正し続ける認識的責任(注 10 で論じた批判的文脈主義的な責任)を課すことで、免責をさせない。

第三に「方法論的要請の「宙吊り」という問題」に対しては、主に、方法論的要請と反転テーゼの関係の再定式化(本稿 4.2 節)によって回避される。方法論的要請を反転テーゼの単なる帰結とみなす従来の理解では、反転テーゼがミニマル化されると方法論的要請の根拠が失われる。本稿は両者の関係を逆転し、方法論的要請に基づく批判的分析が反転テーゼを説得的にするための根拠を与えるという関係を示すことで、方法論的要請を反転テーゼの認識的正当化の成否から独立した、FSP の実効的な構成要素として位置付ける。さらに、方法論的要請が達成テーゼの条件である(エンパワメントの議論)ことを示すことで、この位置付けを補強する。

5 結論

以上反転テーゼと方法論的要請との関係が、後者が前者の単なる帰結ではなく、むしろ後者に基づいた研究の批判的介入、ないし知識主体のエンパワメントによって前者の主張が説得的になるという点を論じてきた。さらには、反転テーゼの前提する達成テーゼが方法論的要請を必要とする点を論じることで、間接的に反転テーゼにとって方法論的要請が重要な役割を果たすことを示した。そこで重要であったのは、方法論的要請による周縁化された知識主体に対するエンパワメントという側面である。これらの作業を通じて明らかにしたのは、方法論的要請がスタンドポイント理論の他の諸テーゼに比べて、実質的には意義のない単なるお題目などではなく、スタンドポイント理論を抑圧に対して抵抗する批判理論として主張する上で、実効的な役割を果たすということである。

参考文献

- [1] Crasnow, S. L. and Intemann, K. 2024. *Feminist Epistemology and Philosophy of Science: An Introduction*. New York: Routledge.
- [2] Collins, P. H. 1986. "Learning from the Outsider Within: The Sociological Significance of Black Feminist Thought." *Social Problems*, 33(6): S14-S32.
- [3] Collins, P. H. 1997. "Comment on Hekman's 'Truth and Method: Feminist Standpoint Theory Revisited': Where's the Power?" *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 22(2): 375-381.

- [4] Collins, P. H. 2000. *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*. 2nd ed. New York: Routledge.
- [5] Collins, P. H. 2019. *Intersectionality as Critical Social Theory*. Durham, NC: Duke University Press.
[パトリシア・ヒル・コリンズ『インターセクショナリティの批判的社会理論』湯川やよい・松坂裕晃・佐原彩子・藤浪海訳, 明石書店, 2024 年]
- [6] Dror, L. 2023. “Is There an Epistemic Advantage to Being Oppressed?” *Noûs*, 57(3): 618–640.
- [7] Freeman, L. 2015. “Confronting Diminished Epistemic Privilege and Epistemic Injustice in Pregnancy by Challenging a ‘Panoptics of the Womb’.” *The Journal of Medicine and Philosophy*, 40(1): 44–68.
- [8] Friesen, P. and Goldstein, J. 2022. “Standpoint Theory and the Psy Sciences: Can Marginalization and Critical Engagement Lead to an Epistemic Advantage?” *Hypatia*, 37(4): 659–687.
- [9] Harding, S. 1992. “Rethinking Standpoint Epistemology: What Is ‘Strong Objectivity’?” *The Centennial Review*, 36(3): 437–470.
- [10] Harding, S. 2015. *Objectivity and Diversity: Another Logic of Scientific Research*. Chicago: University of Chicago Press.
- [11] Hartsock, N. C. M. 1983. The Feminist Standpoint: Developing the Ground for a Specifically Feminist Historical Materialism. In Sandra Harding and Merrill B. Hintikka (eds.), *Discovering Reality: Feminist Perspectives on Epistemology, Metaphysics, Methodology, and Philosophy of Science* (pp. 283–310). Dordrecht: Springer.
- [12] Intemann, K. 2010. “25 Years of Feminist Empiricism and Standpoint Theory: Where Are We Now?” *Hypatia*, 25(4): 778–796.
- [13] Okoroji C, Mackay T, Robotham D, Beckford D and Pinfold V (2023) “Epistemic injustice and mental health research: A pragmatic approach to working with lived experience expertise”. *Front. Psychiatry* 14:1114725. doi: 10.3389/fpsyt.2023.1114725
- [14] Pohlhaus, G. Jr. 2012. “Relational Knowing and Epistemic Injustice: Toward a Theory of Willful Hermeneutical Ignorance.” *Hypatia*, 27(4): 715–735.
- [15] Rolin, K. 2006. “The Bias Paradox in Feminist Standpoint Epistemology.” *Episteme*, 3(1–2): 125–136.
- [16] Rolin, K. 2009. “Standpoint Theory as a Methodology for the Study of Power Relations.” *Hypatia*, 24(4): 218–226.
- [17] Rolin, K. 2011. Contextualism in Feminist Epistemology and Philosophy of Science. In H. E. Grasswick (ed.), *Feminist Epistemology and Philosophy of Science: Power in Knowledge* (pp. 25–44). Dordrecht: Springer.
- [18] Rolin, K. 2016. “Values, Standpoints, and Scientific/Intellectual Movements.” *Studies in History and Philosophy of Science Part A*, 56: 11–19.
- [19] Roessler, B. 2015. Autonomy, Self-Knowledge, and Oppression. In M. A. L. Oshana (ed.), *Personal Autonomy and Social Oppression: Philosophical Perspectives* (pp. 68–84). New York: Routledge.

- [20] Tilton, E. C. 2024. "'That's Above My Paygrade': Woke Excuses for Ignorance." *Philosophers' Imprint*, 24(8): 1–19.
- [21] Toole, B. 2024. "Standpoint Epistemology and Epistemic Peerhood: A Defense of Epistemic Privilege." *Journal of the American Philosophical Association*, 10(3): 409–426.
- [22] Wylie, A. 2004. Why Standpoint Matters. In Sandra Harding (ed.), *The Feminist Standpoint Theory Reader: Intellectual and Political Controversies* (pp. 339–351). New York: Routledge. [「なぜスタンドポイントが重要なのか」飯塚理恵・小草泰訳, 『分析フェミニズム基本論文集』 木下頌子、渡辺一暁、飯塚理恵、小草泰編訳, (pp.238–274), 慶應義塾大学出版会, 2022 年]
- [23] 大橋一平. 2025. 「スタンドポイント理論における反転テーゼのミニマル化のリスク」. 『新進研究者 Research Notes』 (8): 1–9.

著者情報

大橋一平(神戸大学)